

【報告】特設分科会 4 学校ぐるみで取り組む中学生の学力向上

～「いわてスタンダード」「Gアップシート」を活用して～

◆パネリスト	紫波町立紫波第一中学校	校長	岩泉 康喜
	紫波町立紫波第三中学校	校長	藤原美智雄
	山田町立豊間根中学校	校長	高橋 勝
◆コーディネーター	岩手県教育委員会学校教育室	主任指導主事	福士 幸雄

1 特設分科会 4 設定の趣旨

岩手県の中学生の課題の一つは学力です。学校として、どんな手法でこの課題に取り組んでいけばよいのでしょうか。

そう考えたときに、岩手県の小学校での取組が参考になると考えました。その理由は、岩手県の小学生の学力が全国でもトップクラスにあるからです。学力向上に成果を上げている小学校は、取組を学校が一体となって進めています。一人の児童の学力を向上させるために複数の教員がチームとなって取り組んでいます。

これに対して、中学校の現状を振り返ってみると、例えば、数学の点数が低ければ数学科の教科担任が頑張ればよいという考えになってしまうことが多く、学校全体で生徒の数学の学力を高めるための取組をすることは、ほとんどなかったのではないかと思います。また、岩手では、小規模校が多く、同じ教科の先生が一つの中学校に一人しかいない場合が多いのが現状です。学力向上に小学校がチームで行っているのに対し、中学校は個人で行ってきたと言えるかもしれません。この取組体制の違いが、小学校と中学校の学力差につながる要因の一つではないかと考えました。

このことから、中学生の学力向上のキーワードは、「学校ぐるみ」ではないかと考えました。

さらに、学校ぐるみで行う際には「いわてスタンダード」と「Gアップシート」が有効な手立ての一つではないかと考え、「いわてスタンダード」「Gアップシート」を活用し、学校

ぐるみで行うことによって、中学生の学力を向上させることができるのではないかとという仮説をたてました。

そして、平成 24 年度に研究実践校として、紫波町立紫波第一中学校、紫波町立紫波第二中学校、紫波町立紫波第三中学校、釜石市立甲子中学校、山田町立豊間根中学校の 5 校において、「いわてスタンダード」と「Gアップシート」を活用した学校ぐるみの学力向上に取り組んでいただきました。これらの研究実践校の取組や校長先生方のお考えから、教科の枠をこえた学力向上策はどうあればよいのかについて考えを深めていただき、各校での取組の参考にさせていただければと思います。

2 研究実践校発表の概要

(1) 紫波町立紫波第一中学校

「Gアップシート」は、平成 23 年度にも活用していたが、やらせっぱなしになりがちな問題があった。今年度は、月曜日の終学活を 15 分延長して「Gアップシート」の確認テストに取り組んだ。確認テストは、生徒の学習意欲向上と学力向上に有効である。特に、小テストも取り入れた数学に大きな伸びが見られた。

(2) 紫波町立紫波第二中学校

生徒が学習内容を理解する手立てとして「Gアップシート」は有効であった。教師にとっても、「Gアップシート」を活用させようとするのが教材研究につながった。県学

調において、数学と英語で点数にも大きな伸びが見られた。特に、数学の活用問題（一問）において、県平均より 14.5 ポイントも高い結果が得られた。国語は、文法の学習（言語事項）が最も有効であった。

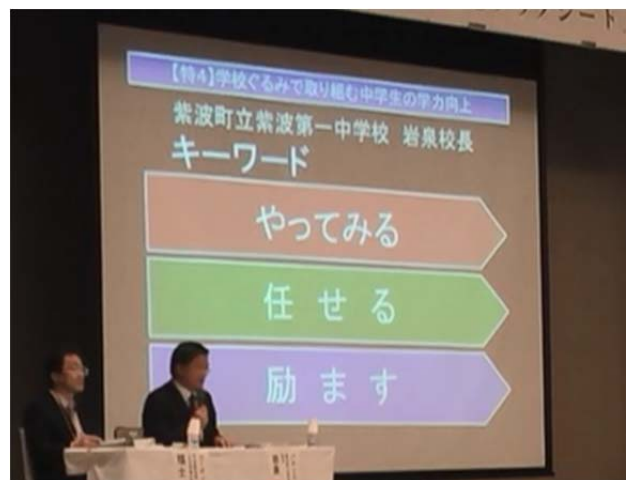
(3) 釜石市立甲子中学校

第三学年を中心に放課後学習や週末課題で「Gアップシート」に取り組んだ。そのことが家庭学習時間の増加、学習意欲の向上、成績の向上に確実につながった。大幅な学力向上を達成した生徒もいる。特に、中位層の生徒から下位層の生徒には、定着度が高く、効果が大きいことが分かった。

(4) 山田町立豊間根中学校

家庭学習として「Gアップシート」を活用するシステムを作って取り組んだ。「朝の会で回収・点検、昼休みに未提出者の徹底指導、終学習での答え合わせ、誤答分析、その後の確認テストと誤答分析」というサイクルで全教員が指導に当たった。家庭学習時間や学習内容の質の向上が図られ、「分かるようになった」「やってよかった」という成就感から生徒の学習意欲向上につながった。取組の成果として、特に、知識や技能にかかわる問題の正答率が向上した。

日の特設分科会のキーワードは学校ぐるみです」という話がありました。学校ぐるみとなると、リーダーシップを取っていらっしゃる校長先生のお考えが大切になってきます。まず、学校経営という視点からどんな工夫がなされてきたのかということ、先ほどの実践発表を含めてお話しいただきたいと思います。紫波三中さんにつきましては先ほど実践発表がありませんでしたので、その部分も含めてお話しいただきたいと思います。



岩泉：今年度取り組む前から、紫波一中では改訂前のものを使った取り組みをしていました。そのことが下地となり、今年度の取り組みが始まっていきました。まず「やってみる」ということだったのですが、事前に先生方に意識があったということで、スムーズに始まりました。私は今年度から赴任したわけで、何らかのリーダーシップを発揮する必要があるのか考えていたのですが、先生方に聞くともう使っているという返事が返ってきました。そのため私がどうこう言うよりも実践のプロジェクトチームに考えてもらって取り組んでももらいました。学習委員会も巻き込んで「Gアップシート」の取り組みを進めてきました。以前から学習委員会が回収して丸付けをするという活動があったのですが、それに「Gアップシート」を活用するという形でした。ボトムアップの取り組みにした方が持続可能になるのではないかと、プロジェクトチームに任せたいでもありま

3 パネルディスカッション



福士：よろしくお願いします。本分科会は、「いわてスタンダード」「Gアップシート」を学力向上の一つの手立てとして、どのように学力向上に取り組むかということがねらいとなっています。本日の最初に長根研修指導主事から「今

した。特に生徒自身が取り組む形にできるのであれば、教師の負担も減らせるのではないかと思います。そこでキーワードの二つ目「任せる」ということで、各係の活動を設定しました。せっかく生徒が取り組んでいますので、その取り組みを評価していくことが必要と考えていましたし、その段取りを組んでいる先生方の励みにもなるということで、三つ目のキーワードに「励ます」というものをあげました。「Gアップシート」を先生方だけでなく学習委員会の取り組みにすることは、生徒に自主的・主体的に学習に向かわせるというきっかけになるのではないかと考えました。



藤原：本校で行ったのは、最初に学力向上の「学びの基盤を作る」ということです。授業だけでなく、授業を支える小さな手立てをしていきたいと思いますということ。これと並行して「Gアップシート」を使いました。「学びの基盤」とは、読み取れる、聞き取れるなど学びのベースになる力で、これは「Gアップシート」を使うときに大変有効に働きました。手立てとしては、以前から紫波三中で行われていた朝練、ノーチャイムなど主体的な取り組みを機能させました。基本スキルとしては朝読書、小集団での話し合いなどをよく使いました。「相乗的に機能させる」というのは、こういう小さな取り組みを、互いを補完するような取り組みとして使っていくということです。「Gアップシート」も同じような考えで使いました。これを単発で使わず、基盤作りと絡めて使い、非常に自然な形

で使用できました。スキルを身に付けるという意味で、本校には「チョコ勉強タイム」というのがあります。これは放課後の教え合いタイムなのですが、「Gアップシート」を課題として出し、その時間の中で教え合いをしました。これが、学習意欲の向上や家庭学習の充実に大きな役割を果たしたと思います。



高橋：本校では昨年度から「Gアップシート」を活用しようと話していましたが、実際は活用されていませんでした。そこで今年度は、活用するという前提で研究主任に方法を考えてもらいました。なぜ使うことを決めたかということ、理由は三点あります。一点目は、学力向上が喫緊の課題であり、センターからこのような良いものが出されているのだからぜひ活用しようということです。二点目は本校の生徒の実態を見たときに、授業に対して受け身的であり、その理由は基礎的・基本的な力の不足ゆえに自信がないのではないかと考えました。そこで、基礎的・基本的な力を付けるために「Gアップシート」を使ってみようということです。三点目は人材育成の視点です。「Gアップシート」は県内全ての中学校に配付されますので、本校の先生方がこれから他校に行っても今回の研究成果を活用できるのではないかと考えたからです。具体的な取り組みについて三つのキーワードでお話しします。一つは「校内体制」です。学校全体で取り組んだのは教科の先生の負担を減らす面もありますが、学級担任が学級の生徒がどんな学習をしているのか把握し、励ましたりしていくことが重要ではないかと考えたから

です。また、他教科の先生に協同意識を持たせたいと思ったからです。二つめは「システム化」です。10分間学習を設定し教科担任が入ることでやらせっぱなしにしない、確認テストを行うことで繰り返し行うようにする、集計表に入力することで学力の落ちている部分を見つけやすくするなどです。生徒の側から見ても流れがはっきりしているので取り組みやすいのではないかと感じています。三つめは「成就感」です。三年生も一年生の問題から取り組んでいますので、「できた」という気持ちを感じているようです。教科の宿題にもしていますので、学習したことが授業で役立つことも多く、成就感を感じているようです。

福士：三人の校長先生から、思いや学校の実態を加味した取り組み状況を教えていただきました。今度は、こういう取り組みで効果があった、こういう信念の元にやって良かったと思うことをお話しただけだと思います。結果だけでなく過程の中で、生徒や先生や地域にとってという視点でお願いします。

岩泉：「Gアップシート」が子ども達に好評であったということ、やったことで基礎基本が身についていると生徒が実感していることが良かったと思うことです。また、こういったことは「Gアップシート」の取り組みをしなければ、一部の意識の高い先生方で終わってしまっていたところでしたが、学校内に広めることができました。さらに良かったところは、学習委員会を中心に学習に取り組むことができたことです。これをきっかけにさらに意欲につなげていきたいと思っています。

藤原：「学びの基盤作り」の中で取り組んで来たことなので、「Gアップシート」が単独でどのくらい効果を上げてきたのかはわかりません。ただ、授業展開等で「Gアップシート」を参考にしている様子が見られます。また、自学

する力が付いたということは言えると思います。家庭学習や宿題は必ずやってきていますし、これは「Gアップシート」によって培われた力だと思われます。また、県学調の点数が上がったというのは、「Gアップシート」がどの程度影響しているかは定かではありませんが、はっきり言えることです。

高橋：継続してやることによって、生徒から「授業がわかった」「前向きに取り組めるようになった」という声が聞こえてきたことが、一番の成果ではないかと思います。授業の中で用いることで、教えることがはっきりし、授業改善につながっているのではないかと感じています。また、計算など前提となる部分で不足していた所を補えているという部分で、スムーズに授業が進んでいると思います。家庭学習の質的な向上も成果としてあげられると思います。そして、本校の学力向上の一つの柱とできたこと、他教科の先生とも共通の話題で情報交換ができるようになったという点が大きな良いところだったと思います。

福士：ありがとうございます。様々なお話を三人の校長先生方からいただきましたが、ここでフロアの方々からもたくさんお話をいただきたいと思います。何か質問ありましたらお願いします。

質問1：今日のお話で「学校ぐるみ」というのがキーワードになっていて共感しています。その中で、いろいろな考えのある先生方をどのようにまとめていったのかという部分と、部活動など忙しい中でどのように時間を運用していったのかを教えてください。

福士：大変重要な質問をいただいたと思います。結果の部分だけでなく、過程の部分について教えて欲しいということ、そして時間を生み出すためにどうやっているのかということをお話し

いただけますでしょうか。

岩泉：部活動との兼ね合いですが、紫波町では月曜日は部活動をしないという取り決めをしています。そこで、月曜日の帰りの会を少し延長するという形で本校では取り組んでまいりました。もしそれがなかったら家庭学習のみで行っていたのではないかと思います。

藤原：「学習の基盤作り」は、小中連携の取り組みの中に家庭学習というものがあつたので、全く何もないところから始めたわけではありません。そのため、ベクトルとしては職員が同じ方向を向いているという部分があつたため、それを活かして組織したという形です。時間運用については「チョコ勉強タイム」というものがあり、朝と昼休みの時間を詰めて、部活動には支障がないように設定しました。

高橋：以前から清掃前の10分間の学習時間があり、それを活用しました。その時間を生み出すために1・2校時、3・4校時、5・6校時の授業間を10分ではなく5分として時間を確保しています。ただ、この時間設定の仕方が生徒のためにいいのかどうかという面、先生方の事務的な作業の時間の部分という面で、まだまだ議論していかなければならない部分だと思います。

質問2：現場にはいろんな先生方がいるかと思いますが、国数英以外の教科の先生方の、学力向上に対する意識改革について教えていただければと思います。

高橋：本校では取り組みを始める前に、研究主任から「チームで」という話がありました。国数英の先生が中心とはなるのですが、印刷を行ったり、国数英の先生が出張等でいないときは丸付けや答え合わせ等を他の先生に行ってもらったりするなど、関わりを持ってもらう事で、

チームで動くという意識を作っています。また、チームで動くことで、「学校全体の課題なのだ」という意識を持ってもらうようにしています。

藤原：「学習の基盤作り」というのが小中連携で以前からありまして、それに乗っかっていくという形でした。また、今年度は学校公開もありましたので、上手く組み合わせて効果を上げていかなければならないという思いを学校全体で持っていました。そのため、新たに何かをとるという状況ではありませんでした。

岩泉：今質問がありましたことは、私も課題だと感じていました。本校では、職員が50名弱おり、会議で話していても、全員が同じベクトルを向いたかどうかは実感しにくい状況です。解決策は見いだせていない所なのですが、私が心がけているのは、授業を見に行くということです。その中で授業に前向きに取り組めない生徒がいると、そのことについて先生方と話し、授業改善の必要性を話しています。また、本校では研究として「協同的な学び」に取り組んでいるところです。職員会議でも小グループの話し合いを取り入れ、生徒にやらせたいことを、まず職員でやってみるようにし、学び合いの研修会としています。点数がとれればいいというものではないと思いますので、生徒が力を付けられるようにどう授業を変えていくかということを考えていく必要があると思います。

福士：様々な質問ありがとうございました。今後も、「いわてスタンダード」「Gアップシート」に対する要望をたくさん寄せていただきたいと思います。可能なものについてはどんどん変えていきたいと思っています。みんなでより良いものにしていくという姿勢でよろしく願います。最後に、今日はあまり触れられなかった「いわてスタンダード」は、どのように活用できるかを、私見でかまいませんので三人の校長先生にお話しいただきたいと思います。

高橋：今日のいろいろなお話を聞いて感じたことは、今までの本校での「Gアップシート」の活用は、生徒の活用であることです。教師の活用が十分に図られていないことが課題であると気付きました。教師が授業に使う際にはその裏付けとしてある「いわてスタンダード」を関連付けて使っていく必要があります、それが本校の今後の課題であると思います。

藤原：指導要領をどんなに見ても、授業における具体の場面はなかなか見えてきません。その時に「いわてスタンダード」を見ることで、各単位時間での到達点を知ることができます。「Gアップシート」の根っこに「いわてスタンダード」があることを理解して、使っていければと思います。また、国数英以外の教科でもこのようなものが作られればいいのではないかと思います。

岩泉：本校の実践発表の最後で、今後は「Gアップシート」と「いわてスタンダード」をセットにしてねらうところに向かって行きたいという話がありました。子ども達に付けたい力を「いわてスタンダード」という形でまとめて下さっていますので、それを私たちが学び直すことで、子ども達が積極的に取り組めるような授業を作っていくことが必要だと思います。

福士：ありがとうございました。「いわてスタンダード」のもとになっているのは、国政研の評価規準の作成例等です。この資料では、前回は設定例でなく具体例となっていました。なぜかという、前回は解説の内容を細分化して出していたからなのですが、とても厚い資料になってしまい、多くの学校で使われませんでした。それで今回は、学習指導要領の指導事項レベルで設定例を作ったのですが、それでは力のある先生しか使いこなせないものになると、私は考えていました。しかし、「いわてスタンダード」では、そこをかみ砕いて明確化・焦点化・細分

化を図り、その上で具体的に示しています。そのため、「いわてスタンダード」は授業の改善に大きく寄与するものなのです。そこを理解して、使っていくことが大事になってくると思います。今日は三人の校長先生方から、意図的・計画的な学校の戦略が必要なのだということを学ばせていただきました。県教育委員会では、学調等の結果から、先生方が「わかる授業」を心がけるようになってきたが、子ども達の学習内容の定着を図ることが課題であると考えています。そのような課題を克服するものとして「いわてスタンダード」「Gアップシート」は有効な手立ての一つではないかと思います。今回学ばせていただいたことを、多くの学校で生かしていただくことを祈って、パネルディスカッションを終了したいと思います。ありがとうございました。

「いわてスタンダード」とは

学習指導要領及び、国立教育政策研究所が作成した評価規準の設定例を基に、その単元において生徒に身に付けさせるべき力を「岩手の中学生に身に付けさせたい力」として、明確化・焦点化・細分化・具体化等をして示したものである。

* 「岩手の中学生に身に付けさせたい力」

平成18年度は、生徒の学力的課題から指導内容そのものの重点化を図り、それを「中核となる力」と名付けた。しかし、今回の改訂に伴い、学習指導要領の内容の重点化を図るのではなく、内容のすべてを十分に身に付けさせたいとの考えから、すべての内容を指導レベルで示すこととし、それを「岩手の中学生に身に付けさせたい力」と名付けた。「岩手の中学生に～」には、「岩手の中学生に岩手の先生が願いを込めて設定した」という意味が込められている。

「Gアップシート」とは

「いわてスタンダード」に示した「岩手の中学生に身に付けさせたい力」と設問が、できるだけ、1対1対応となるように工夫した評価問題である。

